

3. メンバー手記(1)

栗原 和彦

昭和62年8月2日、剣岳ハッ峰六峰Aフェースで、親友である有村正が取り付きから15mほど登った地点から墜落。ランニングビレーを1つも取っていなかったため、取り付き点よりも左側へ約20m落ちて直接地面にたたきつけられた。頭を強打していたため約1時間後、人工呼吸、心臓マッサージの効果も無く息をひきとった。

ここに書く記録は、この山行記録立案から遺体収容までの記録である。

昭和62年5月9日、有村と一緒に松本の「えびす屋」という飲み屋に入った。2人で鹿島槍ヶ岳に東尾根から登った帰りである。酒がまわるにつれて、どちらからともなく、今度どこに登ろうかという話になった。

「やっぱり今年の夏も剣に行きたいな」

と言うと、有村は無言でうなずいた。その場で、具体的なルートについてどうするか話合った。結局ハッ峰六峰AフェースとDフェース、それとチンネに登ろうということになった。自分がAフェースとチンネを主張し、有村がDフェースを主張したからである。

有村は一昨年、文部省が主催している大学山岳部リーダー研修会に3度参加している。その中の夏の研修会は、岩登りについてであり、有村はそれ以降、岩登りを本格的に行なうようになった。研修会は最初の2日間、立山にある研修所で講義を聞き、3日目に剣沢にある前進基地に入る。そして、そこをベースに剣岳の主な岩場で実戦訓練が2日間行なわれる。多くの大学からの参加者があるため、1班3～4人ぐらいに12班まで分けられる。そして、1班ごとに有名な登山家の講師がつくのである。有村は、その時7班で、講師に

「Dフェースに登りたい」

と言ったそうである。しかし、講師には

「Dフェースだけはやめとけ」

と言われたそうだ。その時以来、一緒に山に行くと、よく

「Dフェースに行きたい」

と言っていた。それで多分今度の山行でDフェースを主張したのであろう。

一昨年の夏、さきの研修会の前に、村上(3)有村(2)栗原(2)(カッコ内は当時の学年)で剣岳で合宿をした。その時は、ハッ峰六峰Cフェース、Aフェース、本峰北壁L2、本峰南壁A2に登る予定だった。毎日快晴に恵まれて、最終目標にしていたAフェース以外は3つとも登った。しかし、Aフェース攻撃の前日、自分は風邪をひいてしまった。体調が悪く、自分がブレーキになって2人を危険なめにあわせるのがいやだったので、テントに残ることにした。そして、2人は無事Aフェースを登って帰ってきた。その時以来、どうしてもAフェースに登りたいと思っ

ていた。又チンネについては、文部省の山岳部リーダー研修会で登ってはいるものの、その時は、どう考えても講師のおかげで登れたという感じがあって、自分がとても情けなかった。その時に、絶対自分の力で登ってやと思っていた。

以上の2つの理由により、自分はAフェースとチンネを主張したのである。

飲み屋で、その後もずっと夏の剣岳のことを2人で話し合い、結局、リーダーは有村がやることと、Aフェースの中大ルート、Dフェースの富山大ルート、チンネ左稜線ルートを登ることに決めた。

昭和62年5月16日21時、渡辺宅でいつものようにリーダー会が開かれていた。有村はそのリーダー会に、今回の山行を持ちかけた。自分は、たまたま、他の用事でリーダー会に参加していた。松本でこの計画を話し合った時、前に述べたように主要なルートは決めておいた。そして、リーダーを有村にまかせた時点で、こまかい点は有村にすべてまかせることになっていたもので、その後2人で話し合いを持たなかった。でも、計画は、あの後自分でイメージしていたのとはほとんど同じであった。ただ、唯一ちがっていたのはベースが真砂沢であると思っていたのが、熊の岩になっている点であった。しかし、熊の岩のほうが、より良いので、別にいいと思った。

有村は計画の概要を話し、リーダーが有村でサブリーダーが栗原、人数は4人までとし自分が判断して連れていける者は連れていく、日程は夏の予定がまだはっきりしていないので分らないということを告げた。又、参考資料として『登山大系』と『山と溪谷1985年8月号』を持ってきた。リーダー会では別に問題となることなく、この山行が認められた。

有村と自分は、大学2年の時の夏合宿で、村上さんと一緒に剣岳で岩登りを経験し、夏の大学山岳部リーダー研修会を受けた。3年の時はクラブ内で岩登りを中心となって進めてきた。夏の剣岳での合宿をはじめ、全体山行では穂高の滝谷ドーム中央稜、10月上旬には、北岳バットレスの第4尾根から中央稜への継続登はんや谷川岳一の倉沢烏帽子岩奥壁南稜などを登った。一般的に見たら、たいしてベテランにも見えないだろうが、うちのクラブ内では登はん経験がずば抜けていたためリーダー会内でも信頼されていた。そのため、リーダー会内には

「有村、栗原が行くなら大丈夫だろう」

そんな油断があったのも事実であるように思われる。

翌日のミーティングに、研究会のため出席できなかったのも、有村の部屋を夜10時ごろ訪ねた。そこで

「剣に行きたいって人はいたか」

と聞くと

「村上さんが行きたいって」

と答えた。村上さんなら技術的に問題は無いが、3人だと時間がかかるなと思った。A.C.Dフェースは3～6ピッチだから別に良いが、チンネは12ピッチもあり3人で1日に登るには時間がかか

りすぎる。というのは、夏山の常ではあるが、午後に天気がかくずれる場合が多いからである。それで、そのことを有村と話し合った。やはり4人のほうが良いという結論に達し、もう1人誰かを誘うことにした。候補として喜多山があがった。経験はさほど無いが、よくトレーニングしてるし、性格も明るくて豪快な一面、繊細な面をも持っていて岩登りに適しているからであった。渡辺を誘う手もあったが、今年の夏は新人対象の岩登りを何本も行なっており、忙しそうだったのでやめることにした。

結局、メンバーが6月に入って有村、栗原、村上、喜多山、と決った。

昭和62年7月29日、部室に4人のメンバーが揃った。今日の夜行で出発するので装備点検及び食糧の買い出しをするためである。それまでは、別に4人が集まるという機会を持たなかった。それは、1人1人がトレーニングやルート研究、個人装備のチェックなどを行っているだろうと思っていただけである。又、有村は外交官試験を控えており勉強が忙しく、村上さんは就職活動で走りまわっていたため、なんとなく一緒に集ってやろうという雰囲気が無かったこともある。とにかく、山行が決ってから4人が一緒に揃ったのは、その時がはじめてであった。当然それまでに連絡のやりとりは、個々人で行っていた。しかし、山行を前にして、パーティーとしての一体感を強め、まとまりを作ろうという努力に欠けていたのは事実である。ここに、今回の山行における甘さがあったように思う。

3年生の時、よく有村と2人で山に出かけた。北岳バットレス、谷川岳一の倉沢、冬の表銀座からの槍ヶ岳などである。そこには、いつも、中央稜、滝沢スラブ、冬の東鎌尾根と、自分達がそれまでに経験した山域よりも、技術的に上のところがあり、それを目標に毎日一緒に厳しいトレーニングをした。ルートや装備の研究も一緒に行った。そのため2人の間には、いつも一体感があったしピリピリとした厳しい雰囲気があった。しかし、今度の場合は4度目の剣岳ということもあり、ルートも絶対登れるという自信があるところであったため、山行以前に全く厳しさが無かった。個人個人責任を持ってトレーニングやルート、装備の研究に励むというのは確かに理想である。しかし、それではパーティーとしての雰囲気を良くすることにはつながらない。多分、各自トレーニングやルート、装備の研究は怠らずに続けてきただろう。しかし、ピリピリとした雰囲気やパーティーとしての一体感は、非常に少なかった。つまり、今回の山行については、別にそのような雰囲気づくりをするまでもなく登れるだろう、Dフェースもチンネ左稜線もなんとかなるだろう、まして、CフェースやAフェースなんて……という気持ちになっていた。いくら今までに、その程度のルートは登ってきたという自信があっても、そう考えてはいけない。山に対して常に自分に厳しくなければいけないのに、今回の山行には、そのことが欠けていたのである。

7月29日20時50分頃、4人は上野駅の8番線ホームに集まった。そして、21時26分発越前82号

に乗って富山に向かった。7月30日5時55分、富山に着き、6時19分発の立山電鉄に乗り、7時9分に立山に着いた。いつものように、村上さんが有村を茶化しており、とてもなごやかな雰囲気があった。その日の天気は良かったが、台風の影響で今後の天気は芳しくない。そのため、心の奥底に

「ずっと天気が悪く、今回はあまり登れないかもしれないな」

という一抹の不安はあったが、それ以外全く不安は無かった。

アルペンルートを使って室堂に着いたのは8時40分であった。天気はしだいに良くなっており、少しずつ青空が広がっていた。みんな登山靴に履き替えたり、水を汲みに行ったりして出発に備えた。その時の話題は、もっぱら天気のことであった。

みくりが池を経由して、雷鳥沢テン場下の橋のところで一休みした。有村が

「休まずに剣御前までいくぞ」

と言った。

「気合が入っているな。まあいいか」

と思った。

約400mの急登である。荷が重いので最初はしんどかったが、汗をかくに従って、段々調子が上がってきた。喜多山が遅れぎみなので、立ち止まって後を振り返ると足どりが重そうだ。まあ、今日は天気も良くなってきたし急ぐ必要はない。空を見ると雲の動きが速い。

「台風のせいかな」

ひとり言をつぶやいた。富山市街と富山湾が見えた。

11時頃、剣御前に着いた。人がやたらと多い。北風が強く寒かったので、剣沢側の岩影にザックを下ろし3人を待った。喜多山がバテぎみで3人は遅れていた。村上さんと有村がついているから、別にいいやと思って先に来てしまったのだ。5分ぐらいして3人が着いた。粉ジュースを作って飲む。とてもうまい。剣がよく見える。

「今年も来たな」

「やっぱり剣はカッコイイな」

「今日登りたかったな」

4人は声をはずませて話しあった。

しばらく4人で雑談した後出発。1人で目の前の雪渓を気持ち良く下った。これは一般道から外れているが、ギックステップで下ると断然速い。3人は一般道を下っていた。喜多山がやはり遅れており、村上さんが走るように下るのが見えた。雪渓が無くなってしまい、右にトラバースして一般道に入った。村上さんがすぐに追いつき、2人で話しながら下った。後ろを見ると、遙か遠くに喜多山と有村が見えた。

剣沢には12時頃ついた。野営管理所前にある大きな岩で、ボルダリングを楽しんでいると喜多山と有村が到着。喜多山はすぐに水場に水を飲みに行った。その後もボルダリングをしないで、

ずっとザックに座っているので、相当疲れているんだと思った。有村と村上さんが2人で寝そべって話をしている。これからの行動についてである。自分は、ひたすらボルダリングを楽しんでいたが、10分ぐらいたった時

「今日は真砂沢まででしょう。喜多山がちょっと無理ですよ。それに、明日くずれそうだし、今日熊の岩まで上げるのも、明日上げるのも同じでしょう」

と言うと、村上さんが

「そうだな、あいつには、ちょっときついな。今日別にここでもいいけど、台風のこと考えると真砂沢まで下っておいたほうがいいな」

それまで、重荷のため喜多山に限らず3人とも、かなり疲労していた。又、とても天気が良く昼寝には絶好であった。そして、何よりも剣が真正面に見えるのである。4人は少なからず、今日ここに泊っちゃおうかという気持ちになっていた。しかし、明日からのことを考えると、真砂沢にいたほうが断然良いのである。有村が言った。

「真砂沢まで下ろう」

すぐにザックを背負って真砂沢に向った。本当に天気が良い。30分ほど下って雪溪に入る。ヒンヤリしてとても気持ちが良い。天気のせいかわくステップが効いて雪の状態も良い。毎年、この雪溪を早朝に下っていたので、その時は雪が堅くツルツル滑って、とても疲れたが、その日は、とても気持ち良かった。

午後2時頃、真砂沢に着いた。テン場は思ったよりも混んでいない。小屋のすぐ南側の、両側よりも少しへこんだ所にテントを張った。その後はビールを飲んだりしながら、のんびりと遇した。ぼんやり周りの風景を見ながら

「今年も来たんだなあ。今年は何でこんなに気持ちが良いんだろう」

と思った。去年、真砂沢に着いた時、精神的にとっても辛かった。多分、後輩を沢山連れてきていたせいだろう。でも今年は本当に自分の好きなように登れる。自分の登はんのみに集中できる。そういう気持ちが、自分を精神的に楽にさせていたのだろう。多分、有村もこのことについては、同じだったのではなかろうか。3年の2学期に、よくそのことを言っていた。

「2人だと、何でこんなに気持ちが良いんだろう。自分のことは自分の責任において行動することが出来るからかなあ。やっぱり後輩を連れていく時は、精神的に疲れるよなあ」

自分のことは自分の責任において行動するという言葉は、今思うと、有村の遺言となってしまった。でも、山に関して、本当にそう言うことが出来るだろうか。実際、今回の事故は多くの人を悲しみの淵においこんだ。御家族の方には、何と言ってよいのか分からなかった。富山の密葬の時の、有村のお父さん、お母さん、妹さんのことを思うと胸が痛む。自分のことは自分の責任において行動するというのは、山において理想のことである。自分のことに専念することが、やはり、一番安全なのである。しかし、それ以前に山男は山で死んではならない。山で死ねば、多くの人に迷惑をかけるし、なによりも、多くの人を悲しみの中におとし入れる。山で死んでも、そ

れは自分の責任であるから別によいではないかということは、絶対ないのである。

7月31日、3時起床。テントから顔を出し空を見た。空の半分ぐらいまでは星が見えていた。しかし、5時に出発する時には、すでに剣岳の上のほうはガスっており、空一面がどんより曇っていた。やはり今日は無理だと思った。

5時30分、長次郎沢と剣沢の出合い。少し休んだ後、長次郎雪溪を登る。毎年8月下旬に来ていたときには、いくつか小さなクレバスが開いていたが、今年は全く見あたらない。

30分ぐらい登ると雨がパラパラと降ってきた。予想していたので別に何とも思わなかった。1時間ぐらい登ったところで、左にトラバースして雪溪からはずれて、大きな岩の上で休んだ。村上さんは雨具の上だけを取り出してつけた。自分は雨具の上下をつけ、アイゼンも出してつけた。喜多山は

「雨具はザックの下のほうに入れてしまったので、めんどうなのでもいいです」

と、アイゼンだけをつけた。有村は革の登山靴ではなくトレッキングシューズであり、ステップがきれずズルズル滑ってしんどいらしく、途中で

「アイゼンつけるから先行ってていいよ」

我々を先に行かせたので、まだ、そこまで到達していなかった。

村上さんが

「俺、アイゼン無いから先行くよ」

と行って出発した。自分と喜多山は有村が来てから出発することにした。

有村が来た時、

「少し休むか」

と聞くと手を横にふったので、すぐに出発。断続的に強い雨が降る。後から何パーティーが来ていたが、引き返していくのが見えた。1時間ぐらいたったか、喜多山を見ると、とても寒そうで大分疲労しているようだった。

「カッパ着ろよ」

と声をかけると

「行動している時は、このぐらいのほうが涼しくて気持ちがいいですよ」

と思ったよりも元気なので、まあいいかと思い、またしばらく歩いた。すぐそこに熊の岩が見える。全装で長次郎雪溪を登るのははじめてだったので、けっこうきついなと思った。有村が

「先に行っていいよ」

と言うので、言葉に甘えて、喜多山を有村にまかせて先に行った。村上さんはもうずっと先に行っ
てしまいガスで見えない。

「村上さーん」

叫んでも返事が無い。だいぶ遠くまで行ってしまったようだ。それから10分ぐらい歩くと、突然

声がかかった。

「栗原」

村上さんである。

「左ですか」

「まっすぐ上だ」

少し登ってよく目を凝らすと、ほんやり人の姿が見える。そこまで登って会話する。

「ここから左にトラバースですね」

「そうだ」

有村と喜多山が来るのを待って、すぐにトラバースしてテン場に着いた。既に1パーティーが幕営していた。

「こんにちは」

テントの外から声をかけると、1人が入口から顔を出して

「雨の中大変ですね」

と声をかけてくれた。

「水場どこですか」

「そこにありますよ」

「すぐそこですか」

「そうです」

などと話した後、すぐに設営。しかし、1本のポールの接合部が無くなっており、うまく設営出来なかった。外から見ると、テントの形はポールが1本足りないのでおかしいが、中に入るとすこぶる快適。しばらく、コンロで暖をとり、お茶を飲んで、昼寝をした。

その日は、ずっとゴロゴロして過ごした。夕方になって、大分ガスが晴れてきて、六峰のフェース群が見える。あまりの近さにみんなで驚く。熊の岩に着いた時、隣に設営してあったテントは既に無く、後から上ってきた他のパーティーの3～4人用のエスパーステントが張ってあった。3人パーティーらしく、3人が外に出て、やはり六峰のフェース群を見ている。2パーティーの声が長次郎谷の中に響きわたった。

「あれが中大ルートだな」

「D フェースはやっぱり難しそうだな」

「早く登りたいなあ」

8月1日、3時に目を覚ました。パラパラと雨がテントにあたる音がしていた。3時起床の予定だったが、今日はだめだと思い再び眠った。7時ぐらいになると、村上さんがゴソゴソしているので起きた。

「もう3時過ぎてんじゃないの」

外は既に明るい。村上さんは時計を持っていないのである。

「ええ、もう7時ですよ。一応3時に目を覚ましたですけど、雨が降っていたので、また寝ました」

と答えた。村上さんは、シュラフカバーしか持ってきていない。さらに、テントの一番奥の雪溪側に寝ており、雪溪の寒気が直接体にあたる。また、雨が降り続いており、一本のポールの接合部を紛失していたため、テントの張り方が十分でなく、本体とフライがくっついてしまい、雨水がポタポタとたれて、びしょ濡れになってしまい、寒くてほとんど眠れなかったそうである。有村と喜多山はまだ眠っている。ガスコンロを出して火をつけ暖をとった。今日、また、退屈な一日を過ごさなければならぬと思うと、憂鬱になってきた。

朝食後、また、しばらく眠った。目を覚ますと、ガスってはいるものの、雨はやんでいたので外に出てみる。やはり、テントの中よりも外のほうが気持ちが良い。モヤモヤしていた気持ちが一挙にふっとんでスッキリした。有村と喜多山も外に出てきた。しばらく、3人で話しをした後、喜多山はピッケルを2本持ってダブルアックスで、熊の岩の雪溪を登りだした。有村はピッケルを持ってグリセードの練習に出かけた。村上さんはテントの中で昨日眠れなかったぶんをとりかえしていた。

夕方になると、段々ガスが晴れて、後立山のように青空が見えた。しばらくすると、頭上に雲の切れ間が見え一気に晴れた。また、みんなで外に出て六峰のフェース群を見た。なんと、2パーティーがAフェースとCフェースに取り付いている。隣のテントの人達は、明日下山ということで、ハッ峰上半の縦走にでかけていたが、それを終えて帰ってくるや否や2人がAフェースの登はんに向った。4人でしばらく見た後、テントの中に入った。天気図を見ると、秋田付近に低気圧が停滞しているが、前線が昨日と比べると大分南下している。中国にもう1つ低気圧があるが、その間は高圧部になっており天気が良い。これは、もしかすると、明日晴れるかもしれないと思った。

その晩は、みんな明るかった。話がはずんだ。次の日が晴れるかもしれないという期待がふくらんだからであろう。その日の午前中までは

「今回1本も登れなかったらどうしよう」

「そうなるかもしれないな」

そんな話ばかりしていたので、どこかに暗さがあった。しかし、その晩はちがった。みんなの話は、はずんだ。

夜に1度、寒さのため目が覚めた。かなり冷えこんでいる。これだけ冷えこんでいれば天気は絶対に良いと確信した。

8月2日、3時起床。満天の星空。

「やったー」

みんなの顔に笑みがこぼれる。ついに今日、岩に登れるのである。明るく話し合いながらも、心の中は冷静である。段々気合が入ってくるのがわかった。3人は絶好調だと言っている。自分は少し腹の調子が悪いが、心配するほどでもない。

「CフェースとAフェース、出来ればDフェースも登りたいな」
とみんなで話し合う。既に1日半、停滞している。予備日を2日しかとっていなかったのも、今日Dフェースに登らなかったら、今回は諦めるしかない。そのせいか、どうしても今日中に、Dフェースに登っておかなければならないという気持ちになっていた。しかし、あせりの気持ちからだけで、そう思っていたわけではない。自分の力から判断して、そのぐらいいは出来るという確信もあったのは事実である。

前々日に誰と誰と一緒に登るか決めてあった。有村-喜多山、村上-栗原で組むことになっていた。ジャンケンで決めたのである。言いだしたのは有村で、多分、それは、有村、村上、栗原の3人は剣について知っている度合も、岩に登る能力も、さほど変わらないという判断に基づいていたのだと思う。他のメンバーもそのことに気づいていたのであろう。誰も何とも言わなかった。強いて言えば、自分と有村はクレッターシューズを持っていたが、村上さんは持っていない。そこまで考えると、自分と有村は分かれるべきだったが、偶然そうだったので何も言わなかった。

既にベアが決まっていたので、前日の夜に団体装備は分けてあった。そのため、朝食を食べ終ると、すぐに出発出来た。

4時20分頃、村上さんと有村がCフェースに向った。自分は腹の調子が悪く、熊の岩から少し下ったところで用をたしてテントにもどると、村上さんと有村が雪渓をトラバースしているのが見えた。すぐに行こうと思いヘルメットをつけていると、喜多山が水を汲んでもどってきた。すぐに2人で一緒に出発した。雪渓のトラバースに入って、喜多山はまだ雪渓歩きが不十分なので、かなり遅れてしまった。別に滑ってもたいしたところでないので、先に行くことにする。Cフェースの基部で有村と村上さんが待っていた。村上さんの指示で、基部の雪渓を右側からまくように乗り越し、取付点に到着。3人が一緒になった。喜多山を見ると、大分遅れている。有村を残し、村上さんと一緒に先に行くことにする。岩溝沿いに行くと、階段状になっており傾斜もゆるく簡単そうなので、ノーザイルで行く。20mぐらいい登るとテラスがあった。ハーケンが4本打ってある。1つは遠かったのも、3つにカラビナをかけシュリングを通しアンカーをとった。

村上さんがトップである。確保していると、有村と喜多山が上ってきた。そして、ハーネス、シュリング、カラビナ、ハーケン、ハンマー、ザイルなどを取り出して、登はん準備にかかった。有村が話しかけてきた。

「栗さん、写真撮ってやろうか」

「確保体勢なんて、カッコ悪いからいいよ。登ってる所撮ってくれ」
と答えると、ニコニコしながらカメラを出して、確保体勢を1枚撮った。

すぐにザイルがいっぱいになり、上から

「ビレー解除」

と声がかかった。

「先に行くぞ」

と2人に声にかけて出発。剣岳に来る前に、1日(7/27)古賀志山に練習に出かけているものの、本番は久しぶりなので、ぎこちないなと思いながら登った。

すぐに村上さんのところにつき、トップを交替した。岩登りは1ピッチごとにトップを交替しながら登るのである。Cフェースは、やはり簡単で、登山靴で登っていても難しさを感じない。段々腹の調子も良くなり、登はん感覚ももどってきた。テラスに着いて空を見た。透き通るような青空である。

「やっぱり剣に来て良かった。これから毎年剣に来たいなあ」

とひとり言をつぶやいた。

4ピッチ目のナイフリッジの手前で、Dフェースが良く見える。1パーティー登っているのが見える。村上さんと話をする。

「あれが核心だな」

「そうですね」

「どうやって、あの5mぐらいの垂壁登るんだ。ジョギングシューズだとズルズル滑って、いやだな」

「そうですね。ジョギングシューズじゃつらそうですね」

「今日Dに行く？」

「調子は段々良くなってますよ。出来れば行きたいですね」

そこから見ると、一層Dフェースが難しそうに見えた。

ナイフリッジにさしかかる。順番的にトップになった。2年前に来たなと思った。あの頃は、ただがむしゃらで、ここをどのように乗りきったのか憶えていない。それに比べて、今回のこの余裕は何だ。全くスリルを楽しんでいる。下を見ると何百メートルもスパッと切れおちている。Dフェース側を覗きこむと、こちら側も何もなくスパッと切れおちている。気持ちいいなあと思った。

ザイルの流れが悪くなく、ザイルをひきずるようにテラスに着く。ここで登はん終了にしてザイルをはずしてよさそうだが、すぐ上に難しくはないが、5mぐらいの岩があったので、村上さんをむかえた後も確保した。村上さんはCフェースの頭に着いたらしく

「確保するかー」

と声をかけてきた。とても楽に登っていたので

「別にいいです」

と答え登っていった。

Cフェースの頭に到着。ザイルをはずして回収し、ザックにしまう。水を出して飲む。

「いい天気だなあ」

「そうですね」

村上さんは後立山のほうを見ていた。自分は本峰のほうを見ていた。前剣ば人ばかりになっていた。本峰にも既に何人かが立っていた。長次郎谷に目を移すと、ゾロゾロとアリのように人が登ってきた。

「これは、A フェース順番待ちだな」

村上さんがつぶやいた。時計を見ると7時を少し過ぎたところだった。すこぶる快適なペースである。

すぐにC フェースの頭を登ち、5・6の科尔に向った。踏み跡をたどって、村上さんがトップで下っていった。しばらく下って、かなり危険なところにきてしまった。

「懸垂するか」

と村上さんが聞いてきたので

「少しもどってみましょう」

と言った。20m ぐらい登りかえすと、三の窓雪溪側に入りすぎていたことが分り、右側にトラバースしていった。突然村上さんが、C フェースのほうを向いて叫んだ。

「有村」

C フェースのほうを見ると、ナイフリッジを過ぎたところで、有村が喜多山を確保しているのが見えた。

クライムダウンを繰り返し、5・6の科尔に立った。村上さんが

「どうも腹の調子がよくないので、栗原先に行ってくれ」

と言うので、A フェースの基部を回りこんで、中大ルートの取付きで待った。村上さんがすぐに来た。1パーティーが取付いており、その後で1パーティーが待っていた。思った通り順番待ちである。2人で

「空身で登ろうか」

「D どうしようか」

などと話し合いながらくつろいだ。

30分ぐらいしてルートがあいたので、準備をはじめた。今度は自分がトップである。

村上さんが

「待ちに待ったA フェースだな」

とひやかした。だまってうなずきながら、少しずつ気合が入ってくるのがわかった。

「よおーし」

と言って取り付いた。最初の15m ぐらいは、ホールド豊かなフェースを左上した。思ったよりも簡単である。ランニングビレーを取りながら、カラビナが少し足りないと思った。小さなテラスに着いた。

「ザイルあと何mありますか」

「あと25m ぐらいあるよ」

「それじゃ、もう少し行きます」

それから、かなり難しくなってきた。ランニングピレーが、あと幾つとれるかシュリングとカラビナの数をチェックして、村上さんに

「行きますよ」

と声をかけた。その小テラスから右上して、クラックに入る。ホールドがほとんど無く、クラックの中に手を入れ、手の引きと足のつっぱりでバランスをとりながら登っていく。やっと、片足がおけるぐらいのテラスに着くと、上に先行パーティーがつかえている。よく見ると、すぐ右側に3本ハーケンが打ってある。カラビナも少なくなっているの、そこでアンカーをとり村上さんをむかえることにする。グリップピレーで確保しながら下を見ると、ものすごい高度感である。下で順番待ちのパーティーが写真を撮っている。空にはまだ雲ひとつない。

村上さんをむかえたが、自分の立っているところはルート上なのでつかえてしまった。それで、村上さんのアンカーをとり、上のパーティーはもう抜けていたので2m ぐらい登った。村上さんが小テラスに登り、アンカーをとりなおした。テラスが狭いうえに、確保者をまいて通れるようなところでないの、そのままトップを変わらずに行くことにする。10m ぐらいホールドの細かいフェースを登り、そこが登はん終了点であった。

A フェースの頭に着いた時、さほど疲労はなかった。又、思ったほど感動していなかった。やはり、2ピッチと短いせいであろう。A フェースの頭で有村、喜多山と会うことになっていたが、空身で登ったので、A フェースの基部で待つことにする。

A フェースの基部に10時30分ごろ到着。村上さんと、どうしたんだろうと話しあった。多分、C フェースを登った後、5・6のコルに下降中、三の窓側に迷いこんだか、すでにA フェースを登りきって、A フェースの頭に着いたか、どちらかであろうと思っていた。しかし、有村が知っているの、2人とも全く心配していなかった。とにかく待とうということで、昼食のパンを食べはじめた。

しばらくして、有村の姿が見えた。

「どうしたんだ」

と聞くと、やはり三の窓側に迷いこんだという。その後すぐに喜多山が現れ、2人で昼食を食べはじめた。

その時点では、まだ村上さんとD フェースに行くかどうか決めていなかった。しかし、自分は、A フェースの頭に着いた時、行きたいと思った。今日行かなければ、D フェースに行けるかわからないし、体力的にも十分余裕があった。天候ももつだろうという計算もあった。村上さんは、最初乗り気でなかった。村上さんはジョギングシューズで登っていたので、かなり足もとが滑るようだった。しかし、昼食をとりながら話しているうちに行く気になったようである。

この時のDフェースに行くという判断は、2人だけのパーティーだったら間違いではなかった。体力的に余裕もあったし、雷も来そうになかった。しかし、現実には4人パーティーなのである。2人とも自分の登はん意欲を満たすことしか頭になかった。前から1番Dフェースを登りたがっていた有村の気持ちを考えていなかった。有村のその時の心境は、表情には出さなかったものの、多分くやしさがあつたのではないかと思う。いや、その時はまだ、Dフェースに行く可能性があつたから、それほどでもなかったろうが、中大ルートを登り終え、Dフェース行きが不可能と分かった時、少なからず悔しさはあつたはずだと思う。その「悔しさ」が、今回のランニングビレーをとらなかった行為につながるような気がしてならない。心理学者ではないので、正しい気持ちの動きはわからない。そして、これはあくまでも推測である。しかし、Aフェースの基部で、昼食をとりながらみんなで話し合っていた時、村上さんと2人でDフェースに向かおうと決めていたら、今回の事故が起らなかったような気がしてならない。自分のこの有村を気づかない軽薄さが、今回の事故の要因の1つであるような気がする。

12時頃、村上さんとDフェースの取付きに向う。空にはまだ雲1つ無い。Cフェースの基部付近から雪溪の登りとなる。Dフェースを見ると3人パーティーが取付いている。強い日差しが、雪溪に反射してまぶしくて仕方がない。30分ぐらい歩いただろうか、Dフェースの基部に達し、雪溪をトラバースして富山大ルートの取付きに着いた。1ピッチ目、3ピッチ目、5ピッチ目に重心があるのだが、クレッターシューズをはいているので、自分が先にトップをやることにする。

12時40分頃取付く。疲れは全く無い。高度感にも慣れ少しもビビらない。とにかく絶好調である。左上する岩溝にそって登る。テラスに出る前の5mぐらいが、傾斜もきつく岩も外傾しており、かなり難しい。腕力をたよりに登る。思っていたよりも遙かに難しい。Dフェースはきつくなりそうだなと思った。

2ピッチ目は村上さんがトップ。岩溝沿いに20m位登って5m位トラバースしたところに大きなテラスがある。トラバースが少し嫌だったが、それほど難しくない。そのテラスから、Dフェース富山大ルート最大の難関である5mぐらいの垂壁が見える。そこから20mぐらい上のところにある。トップで向うと最初の20m位は簡単であつた。そこから垂壁にさしかかる。村上さんに

「行きますよ」

と声をかけると

「よおーし」

と気合の入った声が返ってきた。かなり緊張している。下を見ると何百mもの空間に何にも存在せず、スッパリと切れおちている。残置ハーケンをチェックすると、3本のうち2本は効いているが1本はグラグラだった。その上にも50cmぐらいおきに3本打ってある。とりあえずそこまで行こうと思い、2mぐらい登った。非常に難しい。

「これは、落ちるかもしれないな」

と思った。そこでもう1度、カラビナとシュリングの数をチェックした。既に最初の20mで3つ、

垂壁に入って2つランニングビレーをとっているの、大分少なくなっている。段々弱気になってくる。一旦垂壁の下の小テラスに下りて、もう1度ホールドをチェックしようと思い

「一旦下に降ります」

と村上さんに声をかける。

「そうか。それじゃザイルに体重かけていいぞ」

最後のランニングビレーは、自分の体より上にとってあったのである。ザイルに体重をかけて、比較的楽にテラスに着いた。その時、はじめて疲労しているのに気がついた。腕が大分はっている。

「疲れたので少し休ませて下さい」

「いいぞ。難しいか」

「かなり難しいです。カラビナが足りないんですよね」

「そこにアンカーとれるか」

「ええ大丈夫です」

「それじゃ、そこにアンカーとして俺を確保してくれ。そこまで行って、カラビナ、シュリングを渡すよ」

効いているハーケン2本に、カラビナをかけシュリングを通しアンカーをとった。グリップビレーで村上さんを確保した。村上さんが2mぐらい下まで登ってきた。

「ここで確保するよ。幾つかピンがある」

アンカーを取って確保体勢に入る。1mぐらいクライムダウンして、カラビナとシュリングをもらう。

「ここから見ると難しそうに見えないけどな」

「でも本当は難しいんですよ。上のテラスに着いたら休みませんか」

「そうしょうか」

再びラインを読む。段々また力がみなぎってきた。行けそうな気がしたので

「行きますよ」

と声をかけて、再び取付いた。さっきランニングビレーをとったところまでは、簡単にいった。しかし、ここからが問題だ。さっき下で確認しておいたホールドに手をのばす。外傾していて、あまり効かない。足を細かいホールドにそっとおく。不安定な姿勢で、ハーケンにカラビナをかけシュリングを通しランニングビレーをとる。汗がタラタラと落ちる。下を見ると、やはり、ものすごい高度感。

「おちつけ、おちつけ、絶対登れるぞ」

自分に言いかけせる。左手をもう1つ上のハーケンにのばしつかむ。体勢が楽になり、体を岩から離すことが出来た。あと3mぐらいである。握力がおちてるかなと思った。

「ランニング、もう1つぐらいつたほうがいいんじゃない」

と村上さん。下から見てもきがきでないのだろう。また、左手を離し不安定な体勢になる。

緊張しながらランニングビレーをとり、覚悟を決めて

「行くぞー」

とつぶやいた。やはり、ホールドが外傾しており少し滑る。しかし、強引にグイグイ登っていった。ついに登りきった。目の前にテラスがある。肩で息をしながら、やったと思った。ハーケン3つでアンカーをとり、グリップビレーで村上さんを確保した。下の垂壁を見ると、村上さんも舌巻している。

「難しいな」

と言いながら、村上さんが登ってきた。2人でテラスに立って、水を取りだして飲む。しばらく2人で立ち話をする。その時、長次郎谷に

「カラン、コローン」

かわいた音が響きわたった。

自然落石である。そのすごい大きな石が、長次郎の頭から少し池の谷乗越のほうに下ったあたりから落ちてくる。長次郎雪渓で雪訓をしていたパーティーの1人が危ない。かろうじて石から逃げた。人間の体ぐらいの石であった。

「恐いな」

「そうですね」

「よく逃げたな」

時計を見なかったので(見たかもしれないが記憶にない)正確な時間は分らないが、Dフェースの頭に着いた時間から逆算すれば、多分2時半前後であろう。その時Aフェースの頭と基部付近を見わたす。

「Aフェースの頭にいるの有村と喜多山じゃないの」

と村上さん。そういえば、似ている2人がAフェースの頭に立っている。しかし、よく見ると、ヘルメットの色が違っていた。後で喜多山に聞いた話によると、この時2人は、Aフェース中大ルートを登りおえ、5・6のコルに下降中だったようである。

少し休んで出発した。今度は村上さんがトップである。しばらく登ると

「カンテに出ちゃった」

と声がした。3つ目の核心である。確保点からは見えなかったが、その後もザイルが少しずつ流れているので、登ってるんだなと思った。今まで2つの核心で自分がトップをやった。そのため、かなり腕が疲労していたのでホッとした。もう1度さっきのような垂壁がでてきたら、登れるかどうか自信がなかったからだ。しばらくして、村上さんから

「ビレー解除」

とコールがかかった。確保を外し出発。20mぐらい登るとカンテに出た。しかし、さきほどの垂壁よりも傾斜はゆるく、ホールドも豊富でガッチリしている。けっこう簡単に登れた。テラスに